

「夢舞いし」マラソン大会文化を —新しい「まつり」の創造は市民力から

大島 幸夫

Written by
Yukio Oshima
ジャーナリスト

思えば、面妖な風景であった。ほかでもない。つい先ごろまで、大手を振って行われていた有名陸連マラソン大会の話である。

もとより、当の大会は公費の税金を使うことで、目抜き通りを交通規制し、大勢の警官を配備した。あれこれと地元自治体の協力も得た。そのうえで独占したコースを、ほんの一握りの「エリートランナー」と称される強健スピード選手だけが走った。

どんなにランニングが好きであっても、陸連が設定する高度な記録を持たない限り、出場は許されず、沿道なりテレビなりで指をくわえて大会を見ているほかはなかった。

主に実業団や大学なりの陸上競技部に属するエリート高速ランナーに対して、市井のランニング愛好家は、陸連関係筋から「素人ランナー」と格下の呼ばれ方をした。

不惑を過ぎてマラソンを始めたばかりも、そ

んな素人ランナーの1人に違いなかったのだが、エリートマラソンに準ずる制限タイムが厳しい大会に参加した時は「年寄りランナー」とか「冷やかしランナー」とまで言われて走ったものだ。

個人的な記録に触れれば、50歳を目前にして防府マラソンと筑波マラソンを2時間台ぎりぎりまで走った。フルマラソンを3時間以内で完走した者は「サブスリーランナー」と呼ばれて、市民ランナー仲間ではよつとは胸を張れる存在ではあるのだが、有名陸連マラソン大会ともなれば、レベルが違った。

よくサブスリーをクリアして走った時、比較的入門戸が広く、新人の登竜門と言われた別府大分毎日マラソンでさえも、出場資格は持ちタイムが2時間50分以内。「もう、ひと踏ん張りしてなんとか出場を」と願うサブスリー市民ランナーを排除するためのなのか、年々の資格は2時間45分以内へ、さらに2時間40

分以内へと壁が厳しくなり、とてもぼくのよな「年寄りランナー」といつてもまだ50歳になつたばかり」の手、いや、脚が届くところではなくなった。

でも、世界は違った。

閉ざされた日本の陸連大会とは、まるで別次元の、開かれた大会ばかりであった。日本の常識は世界の非常識であり、世界の常識は日本の非常識。これが日本国内では得られない大会参加の醍醐味を求めて、世界の大都市マラソン大会を、それこそ夢中に、小躍りするような感動とともに走り巡ったばかりの、体験的な実感であった。

彼私のマラソン文化のあまりの落差をぼくは痛感したわけだが、嘆いてばかりはいられなかった。で、新聞、雑誌を主に、講演、放送など各種メディアを通じて世界のマラソンに関する体験やオピニオンをさまざまな角度で発信した。「日本でも、まずは首都の東京で、



沿道の大声援を「耳で見ながら」全盲女性ランナーの歓走（東京マラソン）

開かれた大都市マラソンを実現しよう」と各方面に呼びかけた。しかし、陸連はもちろん、行政も、警察も、既成メディアも反応なし。糠に釘で、聞く耳を持つてはくれない。

となれば、出来ることを出来るところから始めてしまうほかはない。みんな、この指とまれ、とぼくは市民ランナー有志を募って、「大江戸夢舞いマラソン実行委員会」を立ち上げ、新生21世紀の夜明けとともに2001年元旦、「銀座を走ろう3万人で」という合言葉を掲げた第1回夢舞いデモランを、お台場副都心か

ら代々木公園までの歩道42・195kmをコースとしてぶち抜いた。

世界並みに開かれた東京マラソンの実現に向けて、その後もぼくらの運動は続き、組織はNPO法人化、名称も「東京夢舞いマラソン実行委員会」と改まって、東京都、警視庁、東京商工会議所、コース最寄りの区役所、町内会など関係各方面への協力呼びかけを続けた。とりわけ積極的に働きかけたのは東京都庁知事室の政策ブレーンたちだった。

ようやく東京都が動き出し、石原都知事が東京マラソンの開催を公表したのは2003年秋のことである。07年の第1回東京マラソン実現に至ったこれらの経緯を、ここで詳述する紙幅はないのだが、一見、トップダウンで決まったかにも見える東京マラソン誕生に、実はぼくら市民ランナー組織によるボトムアップの地道なムーブメントが確かにかかわり、そうした市民主義のうねりこそが大会実現に道筋をつけ、理念的なコアともなったのだ、ということをお記しておきたい。

ところで、その東京マラソンは、今年で6回目。首都で実現した大都市マラソンのオーブン化は、今や、大阪、神戸、京都、名古屋……と全国的なスケールで広がっている。

地方都市のマラソンも参加人数が増え、人気大会のネット参加申し込みは、受付開始から日ならずして、どころか数時間のうちに、定員に達してしまうほどである。

ランニングを愛する人が増え、シティマラ

ソン大会が万余の市民ランナーで活況を呈するのは大変好ましいことに違いない。

それにしても、だ。ヒートアップするシティマラソン大会のエネルギーは、どこに、どんなふうにも、向かおうとしているのだろうか。そして、それはどのような社会に、どんな可能性をはらんでいるのだろうか。

これを考えるについては、いくつかの柱を立てなければならぬ。真つ正直に構えるなら、シティマラソン大会の、とりわけ大都市マラソン大会の、志操ないし思想ともいえるキーワードの設定、である。

まず、その1のキーワードは、「ユニバーサルデザイン」である。

マラソン大会のドアは、本来、万人に開放されている。走るということは人類の歴史とともに古い始原的な営為であり、ランニングは、いわば、基本的人権のひとつと云つていい。あえて、憲法14条の「法の下の平等」を持ち出すまでもない。「走る」基本権は平等であり、貧富、言語、人種、国籍、信条、宗教、障害の有無、性差などによって、区別されたり、遮られたりするものではない。だれにも大会参加の資格があるわけだ。

その2は「目抜き通り（メインストリート）」である。人が少ない河川敷や閑散とした倉庫地帯などでなく、大会が開かれる当の都市を代表する大通りを走る。パリなら凱旋門からのシャンゼリゼ、ニューヨークならマンハッタン1番街といった具合に。

東京マラソンは銀座、新宿、浅草を走るけど、六本木や渋谷、それに大震災や大空襲で犠牲者が多かった鎮魂の地、隅田川を越えた下町は通らない。コースどりは大会の顔であり、血脈である。都市の表現力に富むコースによって、その顔は生き生きとして、血脈に真っ赤な精気がみなぎるといえるものである。

その3は「まつり」。

シティマラソン大会は都市に沸き立つ祭りであって、ルールや規則がついて回る競技会や運動会ではない。正しく言うなら、競技会や運動会はマラソン大会というトータルな祭りの一部ではあっても、すべてではない。強健アスリートの競走からファンランや仮装ランまで走路にランナーのバラエティーがあり、沿道にボランティアの下支え協力と鳴りもの、バンド演奏、ダンスなどのパフォーマンス、そして応援の人垣が渦を巻く。

祭りの本質は、形式、秩序、管理臭を嫌い、気まま、活気、勝手を好む。祭りとはいたって自由な人間の、放たれた魂の賛歌なのである。「秩序ある祭り」とか「管理された祭り」なんという矛盾があり得ないように、形式と秩序が先行する大会もあり得ない。

その4は「粋」。

海外有名マラソンを走って体験的に感じる共通点は、粋である、おしゃれである、インタナーショナルである、ということだ。ランナーにしる、ボランティアにしる、参加する一人ひとりの、個の意志と言おうか、人間的な



パラリンピック優勝者の柳川春己さん（左端）も笑顔で参加（東京夢舞いマラソン）



ハンドサイクルの障害者を交えて和やかに走り盛り上がる（アキレスふれあいマラソン）

輝きが国ごとにキラキラしている。ロンドンマラソンにはイギリス風のユーモアがあり、パリマラソンには人間臭いエスプリがある。それが日本の場合、とかく体育会系のドロ臭い根性といった精神主義や帰属する学校なり企業なりのべたついた集団主義に流れたりする。日本の各都市にだって誇らしい粋な気質、文化があるというものではないか。粋でありたい。野暮であってほしくない。

以上、4つのキーワードの頭文字を並べると、「ゆ、め、ま、い」。そう、われらがランニ

ングムーブメント「東京夢舞いマラソン」のネーミングに通じる。

このムーブメントは、前述のとおり、東京マラソンの実現を目指し、信号順守のウエーブスタートによる歩道ランというマラニックスタイルで始まった東京都心の大会だが、東京マラソン実現という目標が果たされた後も、愛好者の熱い支持と活動のスピリッツを引き継ぎ、自転車ポタリング人気も合流して、毎年途絶えることなく、今年10月7日（日）、第13回目の開催が決まっている。

税金を使わない市民の自主イベントである。スポンサーの理解に支えられつつも、市民ランナーと市民ボランティアの完全手づくり。手前ミソながら、毎回の参加者から「楽しかった」「あたたかい大会だった」と圧倒的な讃辞を浴びているのも、大会が「市民の市民による市民のためのマラソン」という趣旨に徹しているからこそ、とぼくは考えている。

そこでキーワードがもう一つ。「市民主義」がそれである。

市民の頭文字である「し」を加えて「夢舞いしマラソン大会」という言い方をするなら、文言の中の「し」は、文法上は強調の副助詞であり、意味するところはマラソン大会の展開上でも強調していい市民主義のインデックスである。とりわけ重要なのは、大会の主催も運営も市民が担うという点。マラソン大会の主権は主催者である市民ランナーは、走路のみならず、運営面にあっても、脇役ではなく主役であってしかるべきなのだ。

さて、このところ、全国的に澎湃ほうはいと続く新しい都市型マラソン大会の誕生ないしリニューアルだが、これらの現実にはよくが挙げた5つのキーワードにどれほど拮抗しているだろうか。

ぼくら「夢舞い」の同志が、いち早く実践的な呼びかけをしてから10年あまり。大都市で

連鎖するマラソンオープン化の流れは、今さらの感が強いが、オープン化を標榜しつつも、その内実はどうなのだろう。

例えば、ブラインドランナーはもとより、障害の種類を問わないあらゆる障害者のユニバーサルな自由参加は可能なのか。

また例えば、政治家や陸連の元五輪選手といったお飾りでなく、歴史的文化的に世界のマラソン大会事情をよく知り、何よりマラソンを心から愛する一市民としてのレースディレクターがちゃんと機能しているのか。

さらに例えば、走路と沿道が自由に開放され、市民ランナー自身と地元住民が自律的な大会運営にかかわっているのだろうか。

などなど、検証を要する具体的な問いかけが、いくつも思い浮かぶ。

ランニング人気は、これまでの世相にも波状的に浮上した。ひところ、地域興し、町興しを目的に掲げるローカル大会も相次いだものだが、そこで新しい「まつり」が創造できた例はまれでしかない。なぜか。

その多くは自治体の首長、役人が言いだしつべの公営マラソンであり、企画から運営に至るラインに市民力の登用がなかったからだ、とぼくは断じている。管理、秩序、前例、規則を重んじる役所が、どだい、自由な祭りの活気を生み出せるわけがなかったのだ。

新生の都市型マラソンとて同じことで、役所と競技団体の権威が結託するところから、「まつり」の創造はあり得ない。金儲けにさとい関連業者と広告資本がつるんで、市民ランナーをダシにした「まつりもどき」を練り広げるのがせいぜい。それでは欧米の先進的なマラソン大会のように、ランニング文化沸き立つストリートパーティーとはなり得ない。一にも二にも、市民ランナーと市民ボランティアが主役。市民力あつてこそそのパーティーであり、「まつり」なのである。

CEL

大島 幸夫（おおしま ゆきお）

ジャーナリスト。日本ベンクラブ会員。毎日新聞で運動部編集委員、特集版編集部長、編集局特別委員などを経てフリー。世界各国のビッグマラソンを完走し、東京マラソンの実現に道をつけた「NPO東京夢舞いマラソン実行委員会」理事長。市民ランニング界への貢献で「ランナース賞」を受賞。障害走者を囲む「アキレスインターナショナルジャパン」を創設し、視覚障害走者の伴走啓発などで国際賞「ヘレンケラー・サリバン賞」を受賞。著書に『沖繩の日本軍』（新泉社）、『沖繩ヤクザ戦争』（晩聲社）、『人間記録・戦後民衆史』（毎日新聞社）、『日韓ルート』（講談社）、『勇氣に風を』（毎日新聞社）、『地球人の伝説』（三五館）、『市民マラソンの輝き』（岩波書店）など多数。